【場所・面積】 長野県上田市、面積約30ha

【管理目的】

- 「日本を世界の銘醸地に」というビジョンを掲げ、世界で通用する品質のワインを安定的に産出するために高品質なブドウを持続的に確保すべく自社管理畑でブドウ生産を行う。

【サイト概要】

- 遊休荒廃地を垣根仕立てのブドウ畑にし、草生栽培のために定期的に下草刈りを行うことで、希少種を含む生態系豊かな良質で広大な草原を創出していることを、農研機構との2015年からの共同研究で明らかにしている。
- 管理項目

①ブドウ樹の植付及び育成及び果実の収穫
②上記に関する必要な圃場作業
圃場の下草刈り(主に5月～10月で雑草の繁茂状況を考慮して実施)
適切な薬剤（主に殺菌剤を使用）散布（主に5月～8月中旬に状況を見て実施）

【サイト周辺の状況】

- 長野県上田市の丸子地区に位置する。
- 申請サイトは遊休荒廃地を日本ワインのためのブドウ畑に活用したもの。申請地周辺は広葉樹に囲まれており、南側に水田や貯水池が存在し、ブドウ畑が草原として存在することで、里地里山の主要要素が揃っている。

【土地利用の変遷】

- もともとは、桑等を栽培していた畑であったが、市況の変化や生産者の高齢化などもあり遊休荒廃地化していた。上田市や地元丸子地区の陣場台地研究委員会の尽力のもと、100名以上の地権者を取りまとめていただき、2003年から、キリンホールディングスの事業会社メルシャンが設立した農業生産法人がブドウ畑として管理している。

【活動のアピールポイント】

- 遊休荒廃地を当社の事業拡大を目指してブドウ畑に転換することで、人の手が入り、適切に管理されている。その管理を通じて、在来種や希少な草原生態系の回復し豊かな生態系が形成されている。またそれらの生態系の回復について、農研機構と共同で科学的にモニタリングを実施している。

区域全体図・写真①



区域全体図・写真②



【生物多様性の価値、管理内容およびモニタリングの概要(1/3)】

• 生物多様性の価値		• 生物多様性の価値の概況	• 管理内容	• モニタリング概要
（3）	 • 【ワイン畑の管理風景】	• 日本ワインのためのブドウ畑は垣根仕立てで栽培しており、土壌流出を抑えるなど、作業上の理由により年に数回下草を刈る早生栽培を実施。 • これにより、繁殖力の強い植物が優勢になることなく在来種や希少種も生息できる環境である良質で広大な草原を創出している。 • 日本ワインのための草生栽培のブドウ畑を造成・管理することは、里地里山の再生に貢献し、事業を営み拡大することで”ネイチャー・ポジティブ”を実現していることに特徴がある。	• 草生栽培のために定期的な下草刈りを実施。定期的な管理によって草原環境を維持管理している。	• 定期的に植生調査及び昆虫の調査を実施 • 植生調査と昆虫調査は2014年から実施。2019年からは草生栽培がブドウそのものに与える影響を調査するため、クモや土壌生物、鳥などの調査も開始

【生物多様性の価値、管理内容およびモニタリングの概要(2/3)】

• 生物多様性の価値		• 生物多様性の価値の概況	• 管理内容	• モニタリング概要
（４）	 • 【環境学習の様子】	【健全性】 • ワインのためのブドウ栽培のために特段自然保護の活動を行わない状態で、環境省のレッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種を含む昆虫168種、植物288種を確認。鳥もヴィンヤード内で7種55個体が、隣接する林で21種87個体を確認。 • 2016年から従業員参加で、ブドウ畑の使用しない斜面を利用して植生再生活動を実施し、2016年に1m×1mの植物の平均出現率が8,2であったのが、2021年には17.9まで回復。 • その他、オオルリシジミが定着することを期待して、クララを増やす活動も実施。 【生態系サービス　】 • 文化的サービス（自然景観の保全、レクリエーションや観光の場と機会）：ワインツーリズムに取り組む世界最高のワイナリーを選出する『ワールド・ベスト・ヴィンヤード2022』にて、日本のワイナリーで唯一、3年連続選出されている。素晴らしい景観等に対して多くの観光客が来訪している。 • 当該ヴィンヤードがある陣場台地の麓の上田市塩川小学校と共にヴィンヤードで環境教育とクララを増やす活動を実施	• 草生栽培のために定期的な下草刈りを実施。定期的な管理によって草原環境を維持管理している。	• 定期的に植生調査及び昆虫の調査を実施 • 植生調査と昆虫調査2014年から実施。2019年からは草生栽培がブドウそのものに与える影響を調査するため、クモや土壌生物、鳥などの調査も開始

【生物多様性の価値、管理内容およびモニタリングの概要(3/3)】

生物多様性の価値		生物多様性の価値の概況	管理内容	モニタリング概要
（6）	 【ウラギンスジヒョウモン】	• 2014年から実施しているモニタリング調査を通じて、絶滅危惧種を含む昆虫168種、植物288種を確認 • 2014年から実施しているモニタリング調査を通じて、絶滅危惧種を含む昆虫168種、植物288種を確認 • 希少な動植物は以下のとおり ユウスゲHemerocallis thunbergii Baker（長野県レッドリストの準絶滅危惧種） メハジキLeonurus japonicus Houtt.（長野県レッドリストの準絶滅危惧種） スズサイコ Cynanchum paniculatum (Bunge) Kitag.（環境省及び長野県レッドリストの準絶滅危惧種） ベニモンマダラ Zygaena niphona niphona　（環境省レッドリストの準絶滅危惧（NT）、長野県レッドリストの準絶滅危惧種） ウラギンスジヒョウモン Argyronome laodice japonic（環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類、長野県レッドリストの準絶滅危惧種） オオムラサキ　Sasakia charonda charonda（環境省レッドリストの準絶滅危惧（NT）長野県レッドリストの留意種）	• 草生栽培のために定期的な下草刈りを実施。定期的な管理によって草原環境を維持管理している。	• 定期的に植生調査及び昆虫の調査を実施 • 植生調査と昆虫調査2014年から実施。2019年からは草生栽培がブドウそのものに与える影響を調査するため、クモや土壌生物、鳥などの調査も開始
（7）	 【クララ】	• オオルリシジミ(Shijimiaeoides divinus barine)は、長野県の一部と熊本県の一部にしか生息が確認されていない絶滅危惧種であり、その唯一の食草がクララである。 • クララは、ヴィンヤードの縁辺、申請地周辺の水田の畔に生育しており、そのクララを増やす活動をNGOや地域の小学生と共に開始している。 • オオルリシジミは、東御市で確認されており、昆虫の研究者によるとクララが増えれば将来的に飛来してくる可能性はあるとのこと。引き続き地域の皆さんと共に活動を継続する	• 草生栽培のために定期的な下草刈りを実施。定期的な管理によって草原環境を維持管理している。	• 定期的に植生調査及び昆虫の調査を実施 • 植生調査と昆虫調査2014年から実施。2019年からは草生栽培がブドウそのものに与える影響を調査するため、クモや土壌生物、鳥などの調査も開始